

杉谷1番塚古墳

— 第1次調査報告書 —

2020年3月

富山大学人文学部考古学研究室

杉谷1番塚古墳

—第一次調査報告書—

杉谷1番塚古墳

—第1次調査報告書—

二〇二〇年三月

富山大学人文学部考古学研究室

2020年3月

富山大学人文学部考古学研究室

杉谷1番塚古墳

– 第1次調査報告書 –

2020年3月

富山大学人文学部考古学研究室

例　言

1. 本書は、富山大学人文学部考古学研究室（歴史文化コース考古学教育研究分野）が、平成30（2018）年度に実施した、富山県富山市杉谷2630（富山大学杉谷キャンパス内）に所在する杉谷1番塚古墳における第1次調査の成果報告である。
2. 杉谷古墳群内の古墳名称は、遺跡台帳の登録では杉谷4号古墳などとなっているが、本書では杉谷4号墳などとする。なお、1番塚古墳と2番塚古墳、3番塚古墳については、このまとめる。
3. 調査は、富山大学人文学部考古学研究室の構成員が中心となり実施した。
4. 測量基準点の設置は、株式会社エイ・テックに委託して行った。
5. 本書で用いた座標は、国土座標第Ⅷ系（世界測地系）に基づくものであり、南北をX軸、東西をY軸として示した。方位は真北、水平基準は海拔である。
6. 本文の執筆、測量図作成、遺物の実測及び製図、写真図版作成は、高橋浩二（富山大学人文学部教授）と峯村海生（富山大学人文学部学生）が中心となって行った。分担は目次及び各項目の末尾に記すとおりである。
7. 写真撮影は、高橋が行った。
8. 表採遺物、調査図面及び写真等は、富山大学人文学部考古学研究室で保管している。
9. 第7・8図の出土遺物は富山市教育委員会の所蔵である。
10. 調査にあたっては、安念幹倫氏、岡本淳一郎氏、岡田一広氏、鹿島昌也氏、細辻嘉門氏、富山市教育委員会からご教示ならびにご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
11. 本書の編集は、高橋が行った。
12. 本書は、平成30年度及び令和元年度富山大学人文学部傾斜配分経費（フィールドワーク・実験系教育支援経費）の活動成果を含むものである。

杉谷1番塚古墳 第1次調査報告書

目 次

例 言

第1章 調査経過

- | | | |
|-------------------|-----------------|---|
| 1 調査に至る経緯 | 高橋浩二 | 1 |
| 2 調査経過と調査組織 | 村口友美・高橋浩二 | 2 |

第2章 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡

峯村海生・高橋浩二

第3章 既往の調査

- | | | |
|---------------------------|-----------------|----|
| 1 富山市教育委員会による調査の成果 | 峯村海生・高橋浩二 | 12 |
| 2 富山市教育委員会による調査出土遺物 | 大上立朗・高橋浩二 | 15 |

第4章 調査の成果

- | | | |
|---------------------------|-----------------|----|
| 1 富山市教育委員会による測量図の所見 | 高橋浩二 | 18 |
| 2 調査の目的と課題 | 高橋浩二 | 20 |
| 3 測量基準点と調査及び作図方法 | 高橋浩二 | 20 |
| 4 調査成果 | 高橋浩二 | 22 |
| (1) 後方部 | 峯村海生・高橋浩二 | 22 |
| (2) くびれ部から前方部 | 高橋浩二 | 27 |

第5章 表採遺物

峯村海生・高橋浩二

第6章 まとめ

高橋浩二

図 版

抄 錄

図版目次

- 写真図版 1 1 井田川堤防から杉谷丘陵を見る（矢印が杉谷1番塚古墳の位置、南東から）
 2 後方部北東面（東から）
- 写真図版 2 3 後方部北側隅部から北東面を見る（北西から）
 4 後方部東側隅部から北東面を見る（東から）
 5 後方部東側から南東面を見る（北東から）
 6 後方部南東面（南から）
 7 後方部北側隅部から北西面を見る（北東から）
 8 後方部西側隅部から北西面を見る（南西から）
 9 後方部南側隅部周辺（南から）
 10 後方部墳頂部平坦面（南から）
 11 北西側くびれ部周辺（北西から）
 12 北西側くびれ部（北西から）
写真図版 4 13 南東側くびれ部（南東から）
 14 前方部北西面（奥は後方部、西から）
写真図版 5 15 前方部墳頂から後方部を見る（南西から）
 16 方形状の段から前方部を見る（最奥に見える高まりは後方部、南西から）
写真図版 6 17 方形状の段から前方部を見る（南西から）
 18 前方部（左側）から方形状の段にかけて（北西から）
 19 後方部北側の土壙状の高まり（南から）
 20 土器出土状況（第13図1のもの）
 21 表採遺物

挿図目次

第1図 第1次調査参加者	3
第2図 杉谷古墳群と杉谷A遺跡（古川1999を一部改変）〔下祐一郎 作成〕	7
第3図 杉谷4号墳と杉谷A遺跡（富山市教育委員会1975を一部改変）〔下祐一郎 作成〕	7
第4図 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡〔尾関さゆり 作成〕	8
第5図 杉谷1番塚古墳測量図・トレンチ配置図（富山市教育委員会1974掲載図の縮尺を1/300に改変）〔峯村海生・高橋浩二 作成〕	13
第6図 土層断面図（富山市教育委員会1974掲載図の縮尺を1/50に改変）	14
第7図 富山市教育委員会による調査出土遺物	16
第8図 富山市教育委員会による調査出土遺物〔峯村海生・大上立朗 作成〕	17
第9図 測量基準点配置図〔株式会社エイ・テック 作成〕	21
第10図 杉谷1番塚古墳後方部墳頂部平坦面測量図〔峯村海生 作成〕	24
第11図 杉谷1番塚古墳墳丘測量図〔峯村海生 作成〕	25～26
第12図 測量調査作業風景	29
第13図 表採遺物〔峯村海生 作成〕	31

表目次

第1表 杉谷1番塚古墳第1次調査の作業経過〔村口友美 作成〕	4
第2表 測量基準点一覧〔峯村海生・高橋浩二 作成〕	22

第1章 調査経過

1. 調査に至る経緯

杉谷古墳群は、富山県を東西に二分する呉羽丘陵の南西端に発達した標高60～70mの杉谷丘陵（友坂段丘）において、富山平野を望むように丘陵頂部平坦面の南から東縁辺に沿って築かれた、11基の墳墓からなる古墳群である。

この古墳群の内容が明らかになったのは、1974（昭和49）年に富山市教育委員会が実施した確認調査の成果による^[1]。1番塚古墳、2番塚古墳、3番塚古墳、4号墳、5号墳、6号墳、7号墳についてトレンチ調査が行われ、墳形や規模等の確認がなされた。とりわけ4号墳については、その墳形が当時島根県下でのみ確認され、山陰地方の限られた地域に特徴的な弥生墓制である「四隅突出型」とされたことから全国的な注目を集めた。

その後、杉谷丘陵には国立富山医科大学の新設計画がすすめられたが、古墳群そのものは学術的な価値からも建設予定地から除外されるとともに、県有地として保存されることとなった^[2]。2004（平成16）年には、国立大学法人法の施行を受けて、県内に所在する3つの国立大学（富山大学、富山医科大学、高岡短期大学）が統合され、翌年10月に新富山大学（富山医科大学は医学部と薬学部、高岡短期大学は芸術文化学部）が発足した。この統合に伴い、県有地であった古墳群の土地は大学に移管され、富山大学による所有、管理のもとで現在に至っている。

富山大学では、杉谷古墳群がキャンパス内に所在する貴重な歴史的遺産であるという認識から、学術研究の対象とすること、遺跡そのものを広く公開すること、地元の方々が取り組んだ杉谷古墳群顕彰事業^[3]の熱意を受け継ぐこと、さらに古墳群の内容を明らかにするための新たな発掘調査の必要性などの観点から、現状の維持管理ならびに文化財としての保存、活用についての検討が行われた。

人文学部考古学研究室では、以前から富山県を中心とした「北陸地方における古墳出現過程の研究」を研究テーマのひとつとして取り組んできたことから、弥生時代墳墓との関連性を色濃くとどめる杉谷古墳群が、研究と教育の両面において好適なフィールドになるものと判断した。そこで、平成21年度に3ヵ年にわたる杉谷古墳群の発掘調査を計画し、関係機関との調整を行った。幸いにも地元の方々ならびに関係各位の理解と協力が得られるところとなり、調査の実施に至ることとなった^[4]。

第1年次（平成22年度）と第2年次（平成23年度）は、杉谷6号墳を対象に測量調査及び墳丘の発掘調査を実施した^[5]。そして、第3年次（平成24年度）は調査対象を4号墳に移し、東側突出部の発掘調査（第1次）を実施した^[6]。

平成25年度には杉谷古墳群に対する調査継続の方針を確認し、あらたに7ヵ年の調査計画を策定した。計画は本学役員会において了承され、第1年次（平成25年度）は、杉谷4号墳を対象に南側突出部の実態の解明を目的として第2次調査を実施した^[7]。以降、第3次調査を南側突出部の補足調査ならびに西側突出部の解明を目的に実施^[8]、第4次調査を墳丘斜面の実態の解明を目的に東側墳丘隅方向及び墳丘北東辺中央部において実施^[9]、第5次調査を富山市旧トレンチの位置確認、墳頂部の構築状況や墓壙及び埋葬施設の確認等を目的に墳頂部平坦面において実

施³⁰、第6次調査を引き続き墳頂部平坦面において行うとともに、西側突出部の遺存状況の確認を目的に実施した。また、第6次調査では杉谷7号墳を対象に墳丘裾部や周溝の確認などを目的として発掘を実施した³¹。

第6年次にあたる平成30年度からは、調査計画にもとづき対象を杉谷1番塚古墳に移し、測量調査を実施した。次節で記すように、調査は平成30年7月31日から開始し、9月20日に終了した。調査にあたっては、富山大学人文学部ならびに杉谷キャンパスの教職員の方々にさまざまなかたちでご協力いただいた。地元の方々、そして関係各機関とあわせてここに感謝の意を表する。

(高橋浩二)

2. 調査経過と調査組織

今回の調査では、杉谷1番塚古墳の墳形や規模、墳丘各部の遺存状況を把握し、また周辺地形を読み取るとともに、築造時期推定の手がかりを得ることを主な目的として測量調査を実施した。調査に先立っては、事前準備として2018年7月に株式会社エイ・テックに委託して測量基準点の設置を行った。調査期間は2018年7月31日～8月31日及び9月19日～20日である。調査経過は次の通りである。

初日の7月31日は、まず調査機材を搬入するとともに、休憩所のテントを設営した。次に、事前準備で設置した測量基準点の確認と除草作業を行った。そして、これらの作業が終わった後、後方部北側にトータルステーションを設置して、後方部北側から北東側にかけての周辺地形から測量を開始した。

8月1日は、後方部周辺地形の測量が、墳丘北側隅部から北側に設置されているフェンスの範囲まで完了した。

8月2日は、主に後方部北東側における周辺地形の測量を行った。

8月3日は、引き続き後方部北東側における周辺地形の測量を行い、遊歩道南側の崖の範囲までが完了した。

8月4日は、後方部において墳丘北東側斜面の測量を開始した。

8月6日は、引き続き後方部墳丘北東側斜面の測量を行った。また、後方部墳丘南東側斜面の測量を一部分行った。その後、後方部南東側における周辺地形の測量を行った。

8月7日は、後方部墳丘北東側斜面の測量が完了した。その後、後方部墳丘南東側斜面の測量を行った。

8月8日は、後方部墳丘南東側斜面の測量が完了した。

8月9日は、後方部墳丘南側隅部周辺と後方部南東側における周辺地形の測量を行った。また、富山市教育委員会による発掘調査で出土した遺物の実測を行った。

8月10日は、後方部墳丘南西側斜面の測量を開始した。また、富山市教育委員会による発掘調査で出土した遺物の実測が完了した。

8月11日は、後方部墳丘南西側斜面のうち、墳丘主軸以南の測量が完了した。その後、くびれ部から前方部南東側にかけての周辺地形の測量を行った。

8月12日は、後方部墳頂部平坦面の測量を開始した。

8月18日は、引き続き後方部墳頂部平坦面を測量した。

8月19日は、後方部墳頂部平坦面の測量が完了した。その後、後方部南西側斜面のうち、墳丘主軸以北の測量に取り掛かった。

8月20日は、後方部墳丘北西側斜面の測量を開始した。

8月21日は、引き続き後方部墳丘北西側斜面の測量を行った。

8月22日は、後方部墳丘南西側斜面のうち墳丘主軸以北の測量を一部分行った。その後、後方部北西側における周辺地形の測量を行い、完了させた。また、前方部の墳丘北西側斜面のうち、樹木に遮られ、前方部に設置した測量基準点から視界が効かない一部分の測量を行った。

8月23日は、後方部墳丘南西側斜面のうち墳丘主軸以北の測量が完了した。その後、前方部側の測量を、墳丘北西側斜面から開始した。

8月24日は、前方部墳丘北西側斜面の測量が完了した。

8月26日は、前方部墳頂部平坦面の測量を行い、完了させた。また、前方部墳丘南西側斜面の測量を行った。

8月27日は、引き続き前方部墳丘南西側斜面の測量を行った。また、前方部墳丘南東側斜面の測量を行い、完了させた。その後、前方部南東側における周辺地形の測量を行い、遊歩道までの範囲が完了した。

8月29日は、まず前方部墳頂部平坦面における標高最高点の確認を行った。その後、前方部南西側における周辺地形の測量を開始し、とくに方形状の段の周辺を重点的に測量を行った。

8月30日は、引き続き前方部南西側における周辺地形、とくに方形状の段の周辺を測量した。また、写真撮影を行った。

8月31日は、方形状の段の部分において不足部分を測量した。次に、前方部南東側における周辺地形の測量を行い、崖の手前までの範囲が完了した。また、写真撮影を行った。その後、休憩所のテントを撤去した後、調査機材を搬出した。

9月19日は、前方部南東側における周辺地形の測量を行い、崖までの範囲が完了した。その後、前方部南西側における周辺地形を測量した。

9月20日は、くびれ部から前方部北西側、西側、南西側にかけての周辺地形の測量を行い、全ての調査が完了した。

(村口友美・高橋浩二)

杉谷1番塚古墳第1次調査組織

調査主体：富山大学人文学部考古学研究室（歴史文化コース考古学教育研究分野）

調査代表者：高橋浩二（富山大学人文学部教授）

調査参加者：峯村海生、村口友美、尾閑さゆり、小山翔大、坂本美有、下祐一郎、関杏介、永田峻一郎

富山市教育委員会発掘調査出土遺物実測：相場伸彦、大上立朗

（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）



第1図 第1次調査参加者

第1表 杉谷1番塚古墳第1次調査の作業経過

	全体	後方部側	前方部側
7/31	機材搬入、テント設営、基準点確認、除草作業	周辺地形（北側～北東側）の測量	
8/1			
2			
3			
4		墳丘北東側斜面の測量	
5 休み			
6			
7		周辺地形（南東側）の測量	
8		墳丘南東側斜面の測量	
9 富山市教育委員会発掘調査出土遺物の実測		墳丘南側隅部周辺の測量	
10	■	周辺地形（南東側）の測量	
11		墳丘南西側斜面（南半部）の測量	
12		墳頂部平坦面の測量	周辺地形（南東側）の測量
13～17 盆休み			
18			
19		墳丘南西側斜面（北半部）の測量	
20		墳丘北西側斜面の測量	
21			
22		墳丘南西側斜面（北半部）の測量	墳丘北西側斜面の一部測量
23		周辺地形（北西側）の測量	
24		墳丘南西側斜面（北半部）の測量	墳丘北西側斜面の測量
25 休み			
26			墳頂部平坦面の測量
27			墳丘南西側斜面の測量
28 休み			墳丘南東側斜面の測量
29			周辺地形（南東側）の測量
30 写真撮影			
31 テント撤去、機材搬出			周辺地形（南東側）の測量
9/19			周辺地形（南東～南西側）の測量
20			周辺地形（北～南西側）の測量

注

- (1) 富山市教育委員会 1974 参照。
- (2) 藤田 2017 参照。
- (3) 古沢校下ふるさとづくり推進協議会 2009 参照。
- (4) 黒崎 2012 参照。
- (5) 富山大学人文学部考古学研究室 2012・2013 参照。
- (6) 富山大学人文学部考古学研究室 2014 参照。
- (7) 富山大学人文学部考古学研究室 2015a 参照。
- (8) 富山大学人文学部考古学研究室 2015b 参照。
- (9) 富山大学人文学部考古学研究室 2016 参照。
- (10) 富山大学人文学部考古学研究室 2017 参照。
- (11) 富山大学人文学部考古学研究室 2019 参照。

文献

- 黒崎 直 2012 「調査に至る経緯」『杉谷 6 号墳 - 第 1 次発掘調査報告書 -』富山大学人文学部考古学研究室
富山市教育委員会 1974 『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』
富山大学人文学部考古学研究室 2012 『杉谷 6 号墳 - 第 1 次発掘調査報告書 -』
富山大学人文学部考古学研究室 2013 『杉谷 6 号墳 - 第 2 次発掘調査報告書 -』
富山大学人文学部考古学研究室 2014 『杉谷 4 号墳 - 第 1 次発掘調査報告書 -』
富山大学人文学部考古学研究室 2015a 『杉谷 4 号墳 - 第 2 次発掘調査報告書 -』
富山大学人文学部考古学研究室 2015b 『杉谷 4 号墳 - 第 3 次発掘調査報告書 -』
富山大学人文学部考古学研究室 2016 『杉谷 4 号墳 - 第 4 次発掘調査報告書 -』
富山大学人文学部考古学研究室 2017 『杉谷 4 号墳 - 第 5 次発掘調査報告書 -』
富山大学人文学部考古学研究室 2019 『杉谷 4 号墳 - 第 6 次発掘調査報告書 -』
藤田富士夫 2017 「奥羽山丘陵の古墳調査のころー人・モノ・コトを振り返るー」『富山市考古資料館紀要』
第 36 号、富山市考古資料館
古沢校下ふるさとづくり推進協議会 2009 『海を越えての交流 - 杉谷 4 号墳と四隅突出墳 -』「杉谷 4 号墳と四隅突出墳」出版事業編集委員会編

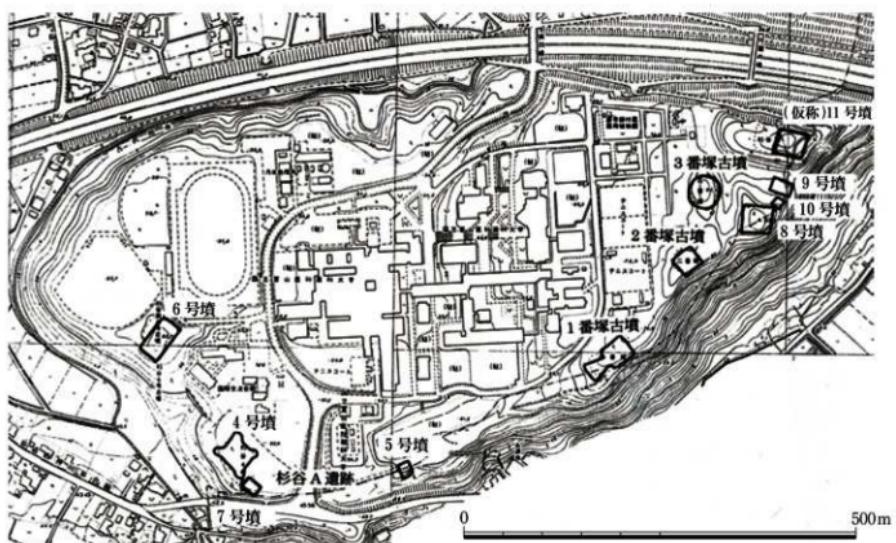
第2章 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡

杉谷古墳群が所在する呉羽丘陵は、富山県のはば中央に位置し、長さ約8km、最大幅約2kmにわたって南西から北東方向へ細長く延びる。呉羽丘陵で最も高い地点は城山で、その標高は145.3mである。呉羽丘陵をはさんで西側には砺波平野、東側には富山平野が形成されている。富山平野には呉羽丘陵と並行するように神通川とその支流の井田川が流れている。

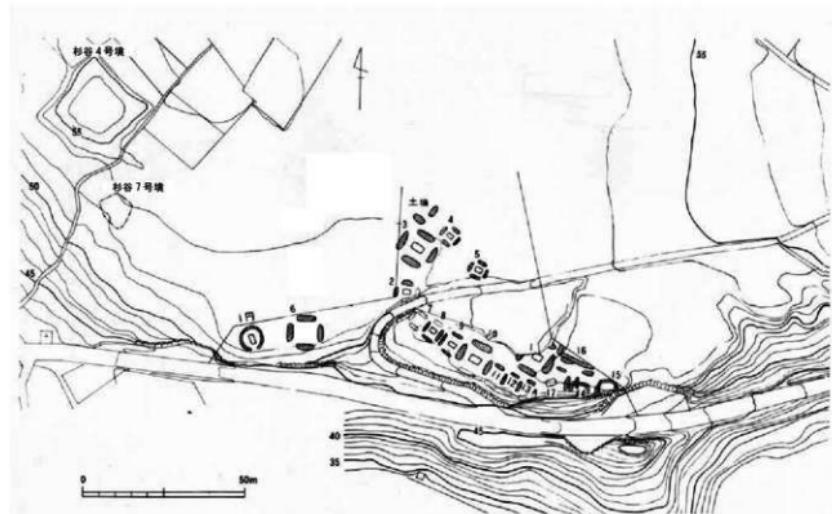
この呉羽丘陵の南西端に発達した丘陵が杉谷丘陵（友坂段丘）であり、杉谷丘陵は細かくみると三つの平坦面に分けられる。このうち呉羽丘陵から続く北東部の平坦面は標高約70mを測り、緩やかに南西方向へ傾斜する。西部の平坦面は標高約60mを測り、北側へ傾斜する。また、南東部の平坦面は西部よりも数m低い平坦面をなすとされている^①。杉谷古墳群は、この杉谷丘陵の南西端部から南東端部にかけて築かれている。ここからは神通川や井田川、また富山平野越しに立山連峰を望むことができる。なお、古墳群が立地する場所は現在、富山大学医学部及び薬学部（旧富山医科大学）や附属病院等の南から東側をとりまく竹林及び緑樹帯となっている。

杉谷丘陵における人々の活動の痕跡は、旧石器時代に遡って確認されている。現在污水処理所となる場所に位置する杉谷H遺跡からは、旧石器時代のナイフ形石器1点とフレイク数点が出土している。縄文時代に入ると、草創期の遺物としては、杉谷A遺跡から頁岩製石槍や杉谷遺跡から安山岩製有舌尖頭器が見つかっている。次に、杉谷古墳群の北側を横断する北陸自動車道内の杉谷64番遺跡からは、縄文時代早期から前期の押型文土器が出土している。さらに、杉谷遺跡からは縄文時代中期の竪穴住居跡14棟、土坑6基、集石2基が弧状に並び、東向きに開口する環状集落が確認されている。また、同遺跡からは内陸河川や富山湾での網漁をものぐたる36点もの石錐が出土している。この他、杉谷G遺跡からは斜位の条痕文が施された縄文時代晩期の土器が見つかっている^②。

弥生時代になると、後期までの遺跡はほとんど未確認だが、終末期頃からは杉谷古墳群の築造がはじまる。杉谷古墳群は四隅突出型埴丘墓1基（4号墳）と前方後方墳1基（1番塚古墳）、円墳1基（3番塚古墳）、長方墳2基（6号墳、9号墳）、方墳4基（2番塚古墳、5号墳、8号墳、10号墳）、墳形不明2基（7号墳、仮称11号墳）の合計11基の墳墓からなる^③。1974年に1～3番塚古墳と4～7号墳の7基について埴丘確認のための調査が実施され^④、次いで1983年度に8～10号墳の試掘調査及び測量調査が行われた^⑤。さらに、9号墳北東側にある杉谷群集塚内の2号塚直下で、地山を掘り込んだ箇所において赤彩土器が出土していることから、1999年にはこの位置に出現期古墳が1基存在する可能性が高いとして、仮称11号墳と名付けられた^⑥。また関連して、5号墳と7号墳の間ににおいて杉谷A遺跡の調査が行われ、方形周溝墓17基と円形周溝墓1基などが確認された^⑦。ここからは、第1号方形周溝墓（鉄鉗1点とガラス小玉）や第2号方形周溝墓（素環頭鉄刀1点とガラス小玉）、第3号方形周溝墓（素環頭鉄刀1点と鉄鉗片4点、ガラス小玉）、第8号方形周溝墓（ガラス小玉）、第10号方形周溝墓（銅鑓1点とガラス小玉）、第17号方形周溝墓（鉄劍1点とガラス小玉、石槍）から遺物が出土している。また、石川県月影遺跡を標識とする月影式土器に対比できるという甕や広口壺、台付装飾壺、高杯、器台、鉢などが出土している^⑧。



第2図 杉谷古墳群と杉谷A遺跡（古川 1999 を一部改変）



第3図 杉谷4号墳と杉谷A遺跡（富山市教育委員会 1975 を一部改変）



第4図
杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡
(国土地理院5万分の1地形図「富山」「八尾」を改変)

次に、呉羽丘陵周辺に立地する弥生時代から古墳時代の主な墳墓や古墳、遺跡をみていく。

まず、神通川下流西岸の呉羽丘陵北端部には百塚遺跡及び百塚住吉遺跡が所在する。ここでは墳長約24mのSZ01と墳長21.2m以上のSZ04という2基の前方後円墳とともに、墳長約17.3mのSZ02と墳長約14mのSZ03という2基の前方後方墳、また小規模な方墳（墳墓）などが発掘調査されている。これらは出土土器等から、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけて築造された墳墓、古墳と考えられている⁹⁾。杉谷古墳群から約0.9km北東の丘陵上には呉羽山丘陵No.16古墳が立地する。墳長約38mの前方後円墳で、前方部の長さは約18mとされる。墳丘の一部に後世の開削が数段にわたってみられる。発掘は行われていない¹⁰⁾。杉谷古墳群から約2km南西の羽根丘陵上には、墳長約58mの前方後方墳である王塚古墳が立地する。富山大学考古学研究室が測量調査をしているが、発掘は行われていない¹¹⁾。また、ここから約0.4km南の同じく羽根丘陵上には、墳長約66mの前方後方墳である勅使塚古墳が立地する。発掘調査が行われ、後方部中央から長さ6.2m以上、幅約6.1mの墓壙が一部確認されている。出土土器は古墳時代前期前半に比定される古府クルビ式のものであることから、定型化した前方後方墳としては県内最古級の古墳と指摘されている¹²⁾。勅使塚古墳から約0.3km南東の丘陵上には、四隅突出型墳丘墓の六治古塚に隣接して向野塚が築かれている。墳長25.2mの前方後方形墳丘墓であり、後方部墳頂において長さ3.5m以上、1.7mの墓壙が検出されている。出土土器から、弥生時代終末期の月影II式期に比定されている¹³⁾。ここから山田川をはさんで約2.2km南の丘陵上には、四隅突出型墳丘墓3基からなる富崎墳群に隣接して、富崎千里古墳群が築かれている。前方後方墳1基、円墳1基、方墳15基からなる古墳群で、前方後方墳の9号墳がもっとも高い所に立地する。墳長34m、前方部長14mで、出土土器から勅使塚古墳と同時期か、やや古い時期の築造と考えられている¹⁴⁾。

古墳時代中期の古墳としては、杉谷古墳群から約0.5km北東の丘陵上に立地する古沢塚山古墳がある。呉羽丘陵や杉谷丘陵、羽根丘陵の古墳は、その多くが丘陵南東側縁辺部に立地し、富山平野に面してつくられるのに対して、この古墳は丘陵北西側縁辺部で、砺波平野に面して築かれている。墳長40.95mの前方後円墳で、前方部の長さは約16m、前方部前端幅は17mである。未発掘だが、後円部と前方部の高低差がほとんどないこと、前方部が八の字状を呈することなどから5世紀前半に比定されている¹⁵⁾。古沢塚山古墳から約0.5km北西へいった呉羽丘陵の低丘陵上には古沢A遺跡が立地する。ここからは古墳時代中期後半の竪穴住居跡1棟が検出されている¹⁶⁾。また、杉谷丘陵北西麓の扇状地扇頂部に立地する境野新遺跡では、古沢A遺跡よりも若干古い段階の竪穴住居跡2棟が発掘されている¹⁷⁾。

古墳時代後期の古墳としては、呉羽山丘陵No.16古墳に隣接する同No.26古墳がある。墳長

第4図 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡名

1. 百塚・百塚住吉遺跡
2. 呉羽山古墳
3. 番神山横穴墓群
4. 呉羽山丘陵No.26古墳
5. 呉羽山丘陵No.16古墳
6. 吴羽山丘陵No.18古墳
7. 西金屋センガリ山窯跡
8. 古沢窯跡群
9. 古沢A遺跡
10. 古沢塚山古墳
11. 吴羽山丘陵No.10古墳
12. 吴羽山丘陵No.6古墳
13. 杉谷G遺跡
14. 杉谷H遺跡
15. 境野新遺跡
16. 杉谷遺跡
17. 杉谷A遺跡
18. 杉谷古墳群
19. 二本松古墳
20. 王塚古墳
21. 勅使塚古墳
22. 向野塚古墳
23. 六治古墳
24. 千坊山遺跡
25. 錫治町遺跡
26. 鏡坂墳墓群
27. 富崎遺跡
28. 富崎墳墓群
29. 離山塚遺跡
30. 富崎赤坂遺跡
31. 富崎千里古墳群
32. 南部I遺跡

約20m、前方部長約10m、前方部前端幅約11mの前方後円墳であり、未発掘だが、前方部が八の字状に大きく開くことから、後期古墳と考えられている³⁸。また、杉谷古墳群から約1.2km南西の丘陵上には二本榎遺跡が立地する。ここでは長径14.2m、短径13.8mの円墳で、横穴式石室を埋葬施設とする古墳が発掘されている。出土須恵器などから6世紀後半～7世紀前半の築造と考えられている³⁹。

以上のように、呉羽丘陵から杉谷丘陵、また羽根丘陵にかけての一帯には数多くの古墳や墳墓、集落遺跡が確認されている。しかし、この地域から東においては、新潟県上越地方までの間に特筆される前方後円（方）墳がほとんど認められていない。このことからも分かるように、呉羽丘陵から杉谷丘陵、また羽根丘陵にかけての一帯は、日本海側東方における前方後円（方）墳の波及の状況を研究する上でも極めて重要な地域と言える。
(峯村海生・高橋浩二)

注

- (1) 富山市教育委員会 1974a 参照。
- (2) 富山市教育委員会 1975・1976a 参照。
- (3) 富山大学人文学部考古学研究室 2012 の「第3章 研究史」では、扇形の現状を呈する7号墳の墳形を方形かと推定した。8～10号墳の墳形については長方形を呈するとした。また、同 2014・2015 の「第2章 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡」では7～10号墳を方墳に含めて記述した。
- (4) 富山市教育委員会 1974a 参照。
- (5) 富山市教育委員会 1984 参照。
- (6) 古川 1999 参照。
- (7) 富山市教育委員会 1975。なお、富山大学人文学部考古学研究室 2012 の「第3章 研究史」では、8号方形周溝墓の西溝のあり方から存在が推定されているにすぎない7号方形周溝墓を除いて、方形周溝墓の数を 16 基と記述した。また、同 2014・2015 の「第2章 杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡」でも方形周溝墓の基数を同様に扱った。
- (8) 富山市教育委員会 1975、林・佐々木 2001、小黒 2002・2003 参照。
- (9) 富山市教育委員会 2009 参照。
- (10) 注(5) と同じ。
- (11) 富山大学人文学部考古学研究室 1990 参照。
- (12) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2003 参照。
- (13) 婦中町教育委員会 2002 参照。
- (14) 注(13) と同じ。
- (15) 富山市教育委員会 1976b。なお、富山大学が2003年に再測量を行ったところ、主軸上での墳長約41.8m、前方部長約17m、前方部前端幅は約16.2mという結果を得た（高橋 2007）。
- (16) 富山市教育委員会 1983 参照。
- (17) 富山市教育委員会 1974b 参照。
- (18) 注(5) と同じ。
- (19) 富山市教育委員会 2012 参照。

文献

- 小黒智久 2002 「富山市杉谷 A 遺跡小考～第 10 号方形周溝墓出土銅鏡をめぐって～」『富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報 富山市の遺跡物語』第 3 号、富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 小黒智久 2003 「鉄製工具」「大境」第 23 号、富山考古学会
- 高橋浩二 2007 「富山市古沢塚山古墳の再測量とその評価」『富山大学人文学部紀要』第 47 号、富山大学人文学部
- 富山县文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2003 「平成 10 年度婦負郡婦中町勅使塚古墳 平成 11 年度中新川郡上市町永代遺跡 平成 12 年度東砺波郡福野町安居窪跡群 平成 13 年度射水郡小杉町中山中遺跡発掘調査報告」
- 富山市教育委員会 1974a 「富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書」
- 富山市教育委員会 1974b 「富山市境野新遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 1975 「富山市杉谷（A・G・H）遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 1976a 「富山市杉谷遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 1976b 「富山市古沢・金屋地内古墳概要調査報告書」
- 富山市教育委員会 1983 「古沢 A 遺跡発掘調査概要」
- 富山市教育委員会 1984 「富山市呉羽山丘陵古墳分布調査報告書」
- 富山市教育委員会 2009 「富山市百塚住吉遺跡・百塚住吉 B 遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2012 「富山市二本榎遺跡確認調査報告書」
- 富山大学人文学部考古学研究室 1990 「越中王塚・勅使塚古墳測量調査報告」
- 富山大学人文学部考古学研究室 2012 「杉谷 6 号墳 - 第 1 次発掘調査報告書 - 」
- 富山大学人文学部考古学研究室 2014 「杉谷 4 号墳 - 第 1 次発掘調査報告書 - 」
- 富山大学人文学部考古学研究室 2015 「杉谷 4 号墳 - 第 2 次発掘調査報告書 - 」
- 林大智・佐々木勝 2001 「北陸南西部地域における弥生時代の鉄製品」『石川県考古資料調査・集成事業報告書』補遺編、石川考古学研究会
- 婦中町教育委員会 2002 「富山市婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書」
- 古川知明 1999 「杉谷古墳群」「富山平野出現期古墳」富山考古学会創立 50 周年記念シンポジウム、富山考古学会

第3章 既往の調査

1. 富山市教育委員会による調査の成果

1番塚古墳を含む杉谷古墳群は、1974年2月15日～3月31日に富山市教育委員会により、実体把握のための確認調査が実施され、その概要が報告書にまとめられた⁽¹⁾。杉谷1番塚古墳の調査では前方部の北西側から南西側にかけてA～Dの4箇所にトレンチが、また前方部の墳頂部平坦面にはEとして4箇所にグリッドが設定された（第5図）。後方部及びくびれ部には、トレンチやグリッドは設定されていない。発掘の結果、A～Dトレンチでは周溝が確認され、Eでは墳丘が盛土築成であることが判明した。富山市教育委員会が実施した杉谷1番塚古墳における調査成果の概要は次の通りである。

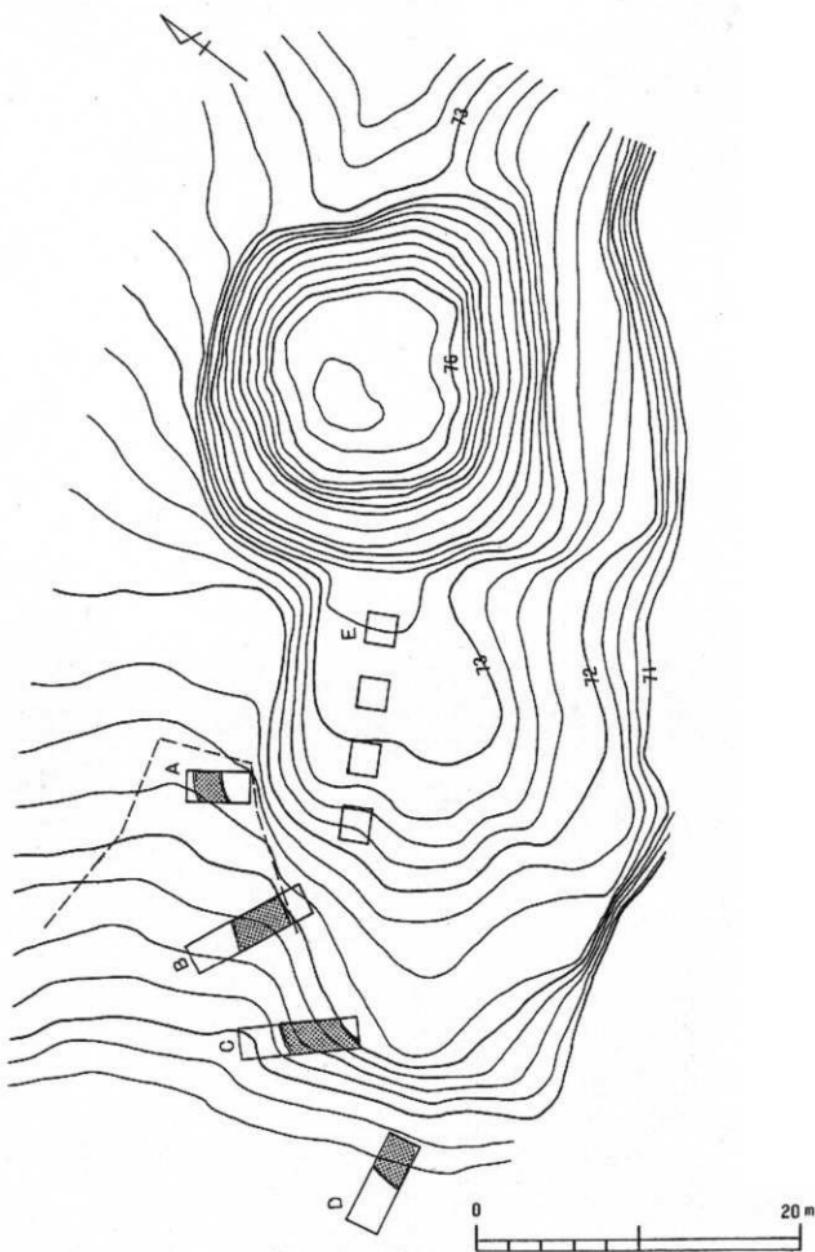
1. 墳形は前方後方墳の外形を示し、一辺が約21m×22mで、高さ3mの方墳部に、高さ1m位で若干くずれた形の張り出し状部が付随すると説明されている。このように、報告書では低平で不定形な形状を呈することから前方部と明言するのは避けられ、その関係から方墳部あるいは方形墳という言葉が使われており、仮に前方部、後方部とするとしている。また、後方部は北東部がやや変形気味で、他はしっかりとマウンドを有するとされている。前方部を含めた全長は約56mを測るという。くびれ部についての記述はみられない。

2. 杉谷1番塚古墳のAトレンチは長さ約42m、幅約18mである。トレンチの深さは約0.6mである⁽²⁾。最上層には表土であるI層（褐色耕作土）が堆積する。I層は図の右側から左側にかけて厚くなり、厚さは右端で約0.15mであるのに対し、左端は約0.5mである。I層の下には右側にⅢ層（黄褐色土〔柔らかい・粗粒子〕）が堆積する。Ⅲ層はトレンチの右端から中央よりの位置まで約1.5m続き、全体的に層の厚さは約0.15mである。トレンチの中央部から左側にかけてはⅣ層（黒色覆土〔細粒子〕）がI層の下に堆積する。Ⅳ層は杉谷1番塚古墳の周溝埋土にあたる層である。この層は深さ0.5mで掘削が終了しているので、正確な厚さは不明である。なお、Aトレンチには他のトレンチと異なり、II層（黒褐色土〔細粒子〕）が認められない。

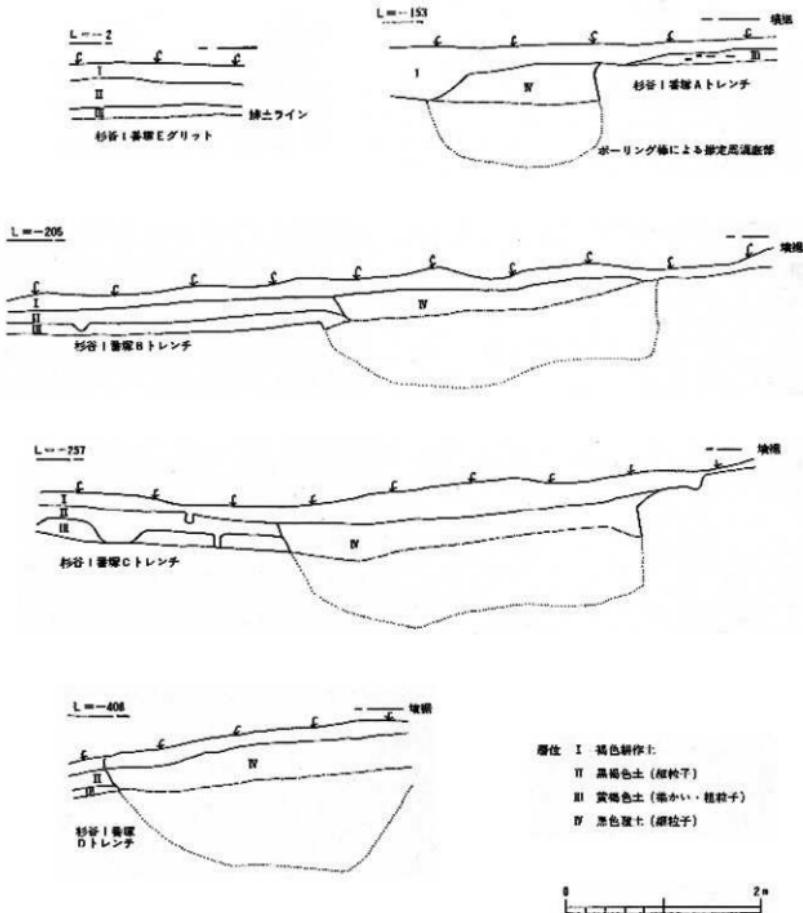
Bトレンチは長さ約8.0m、幅約18mである。トレンチの深さは約0.5mである。I層が約0.15mの厚さで堆積する。図の左側にはI層の下に厚さ約0.15～0.2mのII層が堆積する。その下に約0.1mの厚さでIII層が堆積する。トレンチ中央から右側には、I層の下にIV層がII・III層を掘り込むようなかたちで堆積する。IV層は深さ0.3mの所で掘削が終了しているので正確な厚さは不明である。

Cトレンチは長さ約7.4m、幅約1.8mである。トレンチの深さは約0.6mである。I層が図の左側から右側にかけて層の厚みを増すかたちで堆積する。トレンチ左側におけるI層の厚さは約0.15mであるが、右側では厚さが0.3m以上になる。トレンチの左側ではI層の下にII層が堆積し、その下にIII層が堆積する。II層は全体的な層の厚さが約0.2mである。トレンチの右側から中央部にかけては、I層の下にIV層がII・III層を掘り込むようなかたちで堆積する。IV層は深さ0.4mで掘削が終了しているので正確な厚さは不明である。

Dトレンチは長さ約6.1m、幅約2.1mである。トレンチの深さは約0.5mである。I層が約0.15mの厚さで堆積する。図の左側ではI層の下にII層が堆積し、その厚さは同じく約0.15mである。その下にはIII層が厚さ約0.1mで堆積する。IV層はII・III層を掘り込むようなかたちで堆積して



第5図 杉谷1番塚古墳測量図・トレンチ配置図
 (富山市教育委員会 1974掲載図の縮尺を1/300に改変)



第6図 土層断面図（富山市教育委員会 1974掲載図の縮尺を1/50に改変）

いる。IV層は深さ0.4mの所で掘削が終了しているので正確な厚さは不明である。

Eグリッドはいずれも長さ約1.8m、幅約1.8mである。グリッドの深さは約0.5mである。I層の厚さは図の左側では約0.15mであるが、右側では約0.2mになり、層が左側から右側にかけて厚みを増すかたちで堆積している。I層の下に約0.25~0.3mの厚さでII層が堆積する。その下にIII層が堆積する。III層は深さ0.1mの所で掘削が終了しているので正確な厚さは不明である。

3. Eグリッドを除く4つのトレンチでは周溝が確認されている。周溝の幅は、Aトレンチでは1.7m、Bトレンチでは3.5m、Cトレンチでは3.7m、Dトレンチでは最低3mを測るといい、前方部末端になるに従い広くなる傾向があると指摘されている。富山市教育委員会が行ったボーリング調査によれば、周溝埋土のIV層上面から測った場合の周溝の深さは、Aトレンチで約1.1m、Bトレンチで約1.0m、Cトレンチで約1.1m、Dトレンチで約1.4mとなる⁽³⁾。なお、報告書の記述では、ボーリング調査の結果、周溝はいずれも地山面より深さ1m前後を示し、内側の立ち上がりはどれもが強く、ほぼ垂直をなすと推定されている。加えて、Cトレンチでは墳丘ベースに呉羽火碎岩層が表出し、これが周溝によって切られているとされている。また一方で、これらの周溝が半円状にめぐる感があることから、前方後方墳としてはやや的確ではないという疑問点が挙げられている。

4. 出土遺物に関しては、Aトレンチの墳丘裾部において地山より約5cm浮いて、内面にハケ状工具による整形痕をもつ古式土師器とされる甕形土器破片20点余が出土している。また、Cトレンチ及びEの北グリットから縄文時代の石斧が出土している（第7・8図）。

5. 古墳の築造時期については、Aトレンチより出土した古式土師器などから、古墳時代初期に形成されたものと考えられている⁽⁴⁾。
(峯村海生・高橋浩二)

2. 富山市教育委員会による調査出土遺物

前節の4で取り上げた土師器の甕形土器片と縄文時代の石斧について説明する⁽⁵⁾。

1～5はいずれも甕の胴部片と考えられるものである。1の外面にはケズリ調整と考えられる右下がりの擦痕が見られる。内面には部分的にハケメ調整が認められる。色調は内外面ともに明赤褐色を呈する。胎土はやや粗く、直径1～2mm程度の砂粒を多く含む。焼成は良好である。

2の外面には棒状の工具で表面を搔いたような右下がりのランダムな擦痕が認められる。内面にはナデ調整が施されている。色調は外面が明黄褐色、内面がぶい黄橙色を呈する。胎土はやや粗く、直径1～2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。

3の内外面にはハケメ調整が施されている。色調は内外面ともに橙色を呈する。胎土はやや粗く、直径1～2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。

4の内外面にはハケメ調整が施されている。色調は外面が赤褐色、内面が明赤褐色を呈する。胎土はやや粗く、直径1～2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。

5の外面には浅いハケメ調整と考えられるやや右下がり擦痕が見られる。内面にはハケメ調整が施されている。色調は外面が橙色、内面が明赤褐色を呈する。胎土には直径1～2mm程度の砂粒が若干含まれる。焼成は良好である。
(高橋浩二)

6は最大長12.3cm、最大幅8.6cm、最大厚2.8cm、重量269.8gの、分銅形を呈する打製石斧である。石材は砂岩である。表面には原石面を残す。裏面右側縁は微細な調整剥離により整えられている。刃部には使用痕と思われる剥離痕をとどめる。

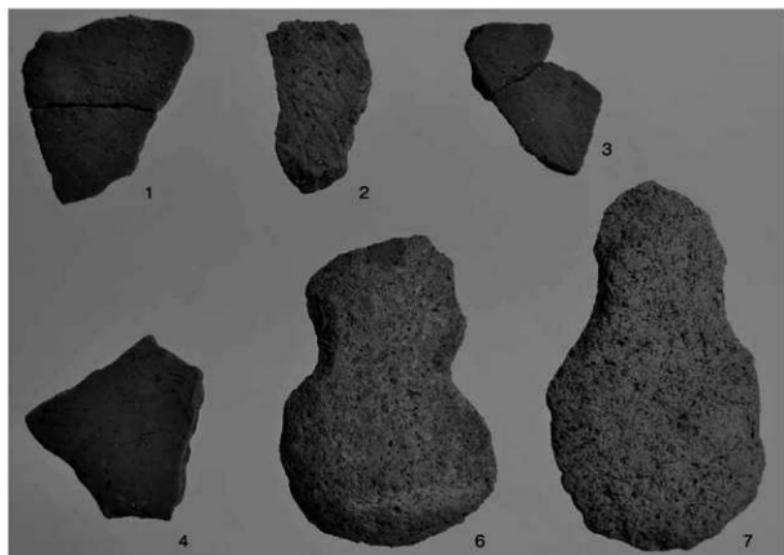
7は最大長14.5cm、最大幅8.7cm、最大厚2.7cm、重量354.9gで、1と同様に分銅形を呈する打製石斧である。石材は砂岩である。表面には原石面を残す。また、刃部付近に使用痕と思われる剥離痕が見られる。裏面は側縁全体に調整剥離が施されている。
(大上立朗)

注

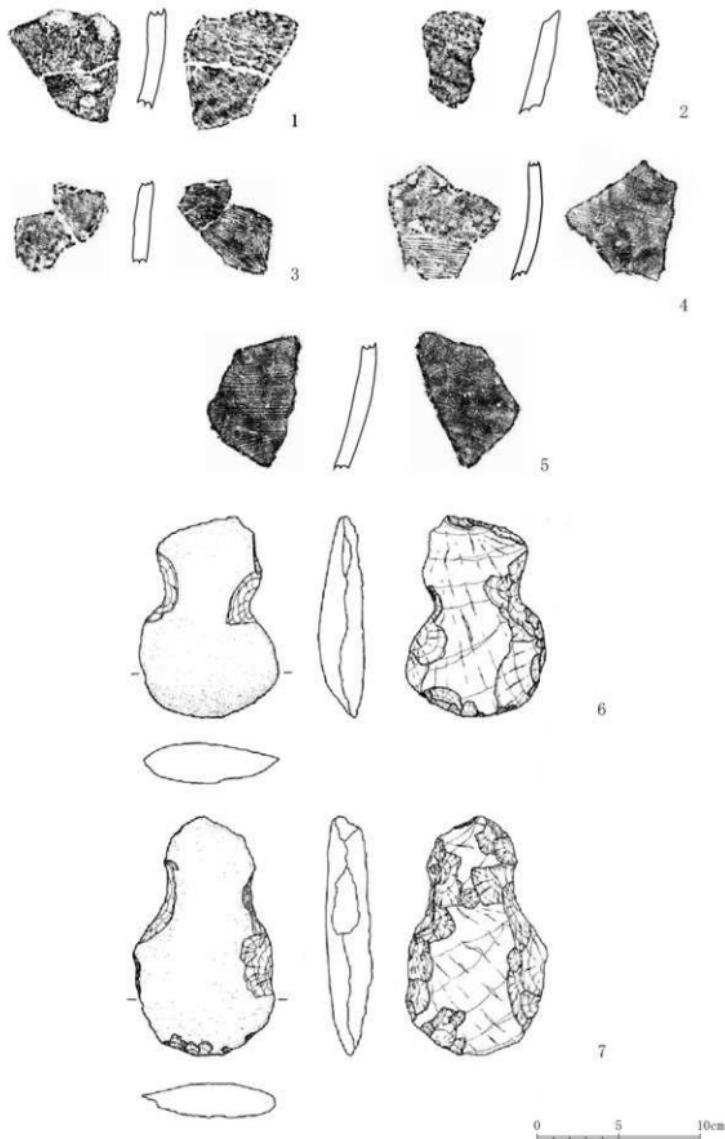
- (1) 富山市教育委員会 1974 参照。
- (2) 各トレンチの長さと幅は第5図、トレンチの深さや土層の厚さは第6図からそれぞれ筆者が計測した。
- (3) 第6図の細点線が富山市教育委員会によるボーリング調査に基づく推定周溝底部であり、各トレンチにおける周溝の深さはこれを基に筆者が計測した。
- (4) 報告書のまとめには、「方形墳に張り出し状部が付随し、前方後方墳的様相を呈する」と記されており（富山市教育委員会 1974：9頁）、はっきりと明言されているわけではないが、このような未発達な墳丘形態も古墳時代初期と推定させる一因と考えられる。
- (5) 富山市教育委員会の報告書には、このうち石斧2点が写真図版に掲載されている（富山市教育委員会 1974 の図版4（下）のうち右下2点）。しかし、実測図は未掲載である。また、土師器は実測図・写真ともに未掲載である。今回の実測及び報告書掲載にあたっては富山市教育委員会にご協力いただいた。土師器については土器片20点余のうち、実測可能な5点を図化した。なお、富山市教育委員会 1974 では古式土師器となっているが、口縁部等を欠いており、時代や時期を判断することはできなかった。

文献

富山市教育委員会 1974 「富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書」



第7図 富山市教育委員会による調査出土遺物



第8図 富山市教育委員会による調査出土遺物（縮尺1/3、富山市教育委員会所蔵）

第4章 調査の成果

1. 富山市教育委員会による測量図の所見

杉谷1番塚古墳は、呉羽丘陵南西端に発達した杉谷丘陵内の三つの平坦面のうち、南東部平坦面の標高約71～76mの箇所に、側面を富山平野へむけて築かれた前方後方墳である。1974年に富山市教育委員会によって実体把握のための確認調査が行われ、その概要とともに本書第5図のような測量図・トレンド配置図が公表されている¹⁾。ここでは、この図に基づき、測量図から読み取れること、また測量図には示されていないことなどについて、①古墳の立地、②後方部、③くびれ部から前方部に分けて見ていく。

古墳の立地 北東側から南西側へと緩やかに降る傾斜面に古墳は立地する。古墳の約4～6m南東側からは崖面になっている。標高71.250（前方部側）～72.500m（後方部側）の等高線辺りが崖面のはじまりにあたる。その反対側、すなわち古墳の北側から西側は広い平坦面となっているが、古墳はこの崖面に比較的近いところにある。古墳の北東側には小さな尾根筋が伸びてきており、後方部を高所側に、前方部を低所側に置いて、側面を崖面側の富山平野へむけて築かれている。

なお、図ではこの尾根筋が後方部の中央へむかって伸びているが、現状ではもう少し東側隅部に偏って見られる。尾根筋の等高線上の73という標高の表記は74の誤りだろう。

後方部 後方部の西側隅部では標高72.500mの等高線、北西側から北側にかけては73.000～73.750mの等高線、また北東側では74.000mの等高線、そして東側隅部から南側隅部にかけては73.000～73.250mの等高線より上の傾斜が急になっている。富山市教育委員会の報告書には後方部墳裾の位置は示されていないが、上記の等高線の箇所を墳裾に想定しているものと考えられる。これは、後方部の一辺が約21m×22mとされていることとも概ね一致する。後方部北東側から東側隅部の墳裾部がここだけ外側へふくらみ、報告書でもこの箇所に関してやや変形気味と記しているが、その原因についてははれられていない。あらためて第5図を見ると、南側隅部の墳裾部も若干外側へふくらんでいる。また、後方部北西面中央における墳裾部もわずかに外側へとふくらむ様子が見られる。一方で、後方部の北西側から北側隅部にかけては、墳裾部が内側へ入りこむことに加え、他の箇所の墳裾部と比べて等高線の間隔が極端に狭く、急傾斜をなしていることが分かる。このように、墳裾部は北東側だけでなく、複数の箇所において直線部分の乱れが見られることから、後世の削平や埋没による改変が全体的にすんでいるものと考えられる。報告書によれば、前方部の北西側から南西側では発掘で周溝が確認されている。しかし、後方部においては、北側隅部と東側隅部との間の標高73.500～74.000mの等高線にその痕跡がたどれるものの、他の箇所には周溝の存在を示すような等高線の様相は認められない。このことも墳裾部の埋没がすんでいることを傍証させる。

墳丘斜面については、隅部の等高線はいずれも曲線を描いており、稜線が失われているようである。また、前方部に面する南西面の等高線も、西側及び南側隅部から引き続いてやや曲線を描いている。加えて、西側隅部から南側隅部にかけての墳丘斜面中程においては、標高74.250～74.750mの等高線の間隔が他の箇所と比べてかなり広がっている。その他、北西面や南東面においても等高線の乱れが目立つ。

墳頂部については、標高 76.000m と 76.250m の等高線の間がやや広く、傾斜が緩やかになつており、図には明示されていないが、この辺りに墳頂部平坦面端部が位置するものと考えられる。墳頂部には広い平坦面が見られる。その中央部には 5.3×5.5 m 程の歪な楕円形の浅い溝みが現在認められるが、図には示されておらず、文章でもふれられていない。また、この溝みを囲むように北東側から西側にかけてわずかばかりの高まりが認められるのだが、墳頂部平坦面の西に偏って見られる標高 76.500 の等高線がこれに相当するのかもしれない。

くびれ部から前方部 北西側くびれ部では標高 72.000m の等高線、そして前方部北西側の A トレンチ付近では 71.500 ~ 71.750m の等高線より上の傾斜が急になつておる。この箇所では、現状でも前方部側面のやや外側に開く形がよく残つて見られる。現墳丘と A トレンチで確認された周溝とがやや離れているのが気になるところである。

これに対して、南東側くびれ部から前方部側面にかけては、等高線の間隔が広く、側面の傾斜が緩やかになっている。また、前方部側面を巡る等高線の描写も南北対称にはなつておらず、前方部先端へむかって大きく外側へ開いていく様相が見られる。

前方部側面の等高線は、A トレンチのところで屈曲して南側へむかっていく。ただし、前方部前面を巡るような等高線の描写をなしてはいない。等高線は直線とはならず蛇行しており、その間隔も広がつておる。そのため、前方部前面がどの箇所に位置するのか判断を困難にさせている。報告書の見解では、一部周溝のあり方が問題になるとしながらも、A ~ D トレンチで確認された遺構が杉谷 1 号墳古墳の周溝であるとの認識のもと、前方部を含めた全長が約 56m を測るとしている。このように報告書では、C トレンチや D トレンチの辺りまで前方部が伸びることが想定されている。C トレンチから D トレンチ北東側にかけては、標高 70.000 ~ 71.250 m の等高線の箇所に高さ 1.0m 強の段が付き、等高線も比較的直線を描いておる。前方部が D トレンチの辺りまで伸びるとすれば、この段が前方部の残丘になるものと思われる。しかし、一般的な前方後方墳と比べて前方部が極端に長く、バランスを欠いた形狀である。この段の北東側では、標高 71.250 ~ 71.750m の等高線の間隔が広がつておる、不定形だが、ここに幅広の平坦面が見られる。報告書ではこの平坦面のことはふれていないが、前方部との関係を検討することが必要と思われる。

墳頂部については、北西面では標高 73.000 ~ 73.250m の等高線から平坦面がはじまつており、この箇所に墳頂部平坦面端部が位置するものと考えられる。墳裾部と同様に、現状でも墳頂部平坦面端部がよく残つて見られる。これに対して南東面では、くびれ部からややすんだ箇所から、標高 73.000m の等高線は外側へと開き、そのためか図では墳頂部平坦面の幅が実際よりも広い印象を受ける。南西面では標高 73.000m の等高線辺りまでは平坦面をなすが、72.750m の等高線からは低所へむけて緩い傾斜がはじまつておる。

前方部と後方部の墳頂部平坦面で測ると、その比高差は図上で約 3.5m となる。高くて明確な墳丘をもつ後方部に対し、張り出し状部が付随すると報告書で述べられているように、前方部は低平で、前端がどこまで伸びるか不明確な現状を呈している。

なお、A トレンチのすぐ北東側から西側と南側へかけて、この図の中では唯一の点線が入れられているが、説明はなされていない。南側へむかう点線は段差に沿つておるようだが、B トレンチの所で途絶しており、その意図するところは明確ではない。

(高橋浩二)

2. 調査の目的と課題

このように、富山市教育委員会によって提示された測量図・トレンチ配置図は、古墳の立地環境や後方部及び前方部の特徴、また墳丘の変形による等高線の乱れなどをよく捉えたものである。ただし、図には現状の墳裾線や、後方部及び前方部における墳頂部平坦面端部のラインなどは示されてはいない。加えて、等高線の乱れや不揃いな等高線間隔が表す斜面の崩落や削平などの具体的な範囲も示されていない。そのため、墳丘の遺存状況が不明確で、より詳細な墳丘形態の理解を難しくさせている。また、富山市教育委員会による調査後には、古墳の南東側墳裾部を通る遊歩道が敷設されるなど改変がかなりすんでおり、図の描写と一致しない点が数多く見受けられる。

そこで、これらのことと踏まえるとともに将来の発掘にも備えて、あらためて測量調査を実施することとした。具体的な目的と課題は次の通りである。

①測量は、トータルステーションを用いて、平面直角座標系第Ⅷ系（世界測地系）による座標にのせて行うこととした。その際、現状の墳裾線や墳頂部平坦面端部のライン、墳丘斜面の崩落や削平などによる変形箇所、また崖線や丘陵の傾斜変換ライン、そして遊歩道などを把握し得るかぎり測点し、等高線とともにこれらも表現した測量図を作成する。

②測量図によって墳丘の遺存状況が把握できるようとする。それとともに、墳丘の特徴を明らかにし、墳形や規模の再検討につなげる。また、墳形から推定される築造時期をあらためて考えることにつなげる。

（高橋浩二）

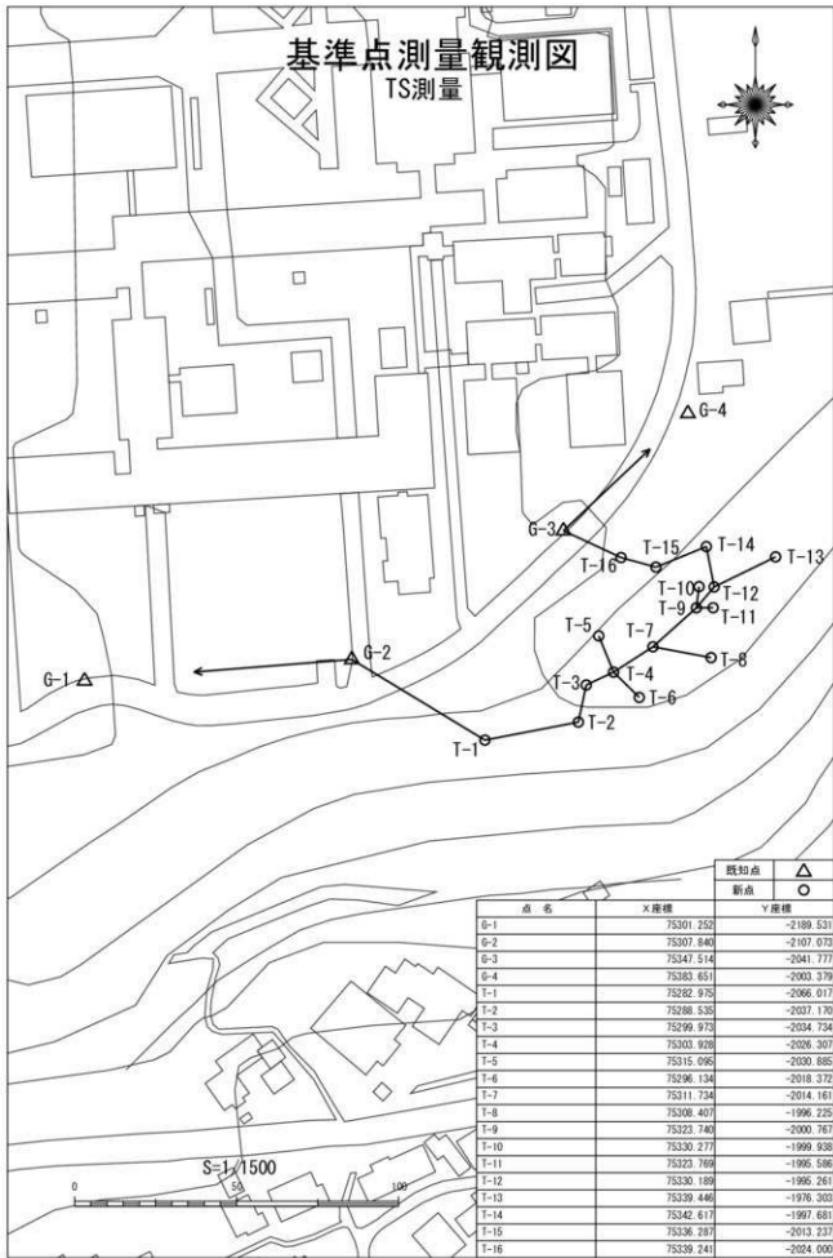
3. 測量基準点と調査及び作図方法

株式会社エイ・テックに委託して、平面直角座標系第Ⅷ系（世界測地系）による測量基準点の設置を行った。設置した測量基準点は、第2表及び第9図のとおりである。

G-1～3は富山大学杉谷キャンパス内において、いずれも道路脇の側溝やガードレール基礎などのコンクリート上に設定した。また、G-4は道路脇の丘陵掘削面にプラスチック杭を埋設して設定した。そして、これらの基準点を用いて、道路に隣接する駐車場から杉谷1番塚古墳へと通じる遊歩道沿いに、T-1・2・6・8・13を、また古墳上とその周辺にT-3～5・7・9～12・14・15を同じくプラスチック杭を埋設して設定した。T-3・4は前方部の南西側、T-5は前方部の西側、T-7は前方部墳頂部平坦面、そしてT-9～12は後方部墳頂部平坦面、T-14は後方部の北側、T-15は後方部の北西側に位置する。

調査はT-3～15のいずれかにトータルステーションをまず立て、そこから視認できる基準点を後視点として座標を入力した後、反射スタッフを用いて約0.15～0.4mの間隔で測点を行った。古墳西側から南西側の平坦面においては間隔がこれより広くなる箇所も一部あるが、墳裾や墳頂部平坦面の周辺、また傾斜の変り目などの箇所では、基本的には細かく測点するようにした。測った点の合計は約17600点になる。

トータルステーション内に記録されたデータは、毎回研究室に戻った後にパソコンに移し、フリーソフトを用いて機械的に25cm間隔の等高線で図化した。しかし、等高線の描写がやや粗く、報告書に掲載する図としては適切ではないため、あらためてAdobe社Illustrator cc2017を用いてデジタルトレースを行った。また、墳裾線や墳頂部平坦面端部のライン、崖線や丘陵



第9図 測量基準点配置図（縮尺 1/1500）

第2表 測量基準点一覧

点名	X 座標	Y 座標	標高 (m)	点名	X 座標	Y 座標	標高 (m)
G-1	75301.252	-2189.531	58.742	T-7	75311.734	-2014.161	73.230
G-2	75307.840	-2107.073	63.099	T-8	75308.407	-1996.225	72.123
G-3	75347.514	-2041.777	68.537	T-9	75323.740	-2000.767	76.414
G-4	75383.651	-2003.379	73.842	T-10	75330.277	-1999.938	76.492
T-1	75282.975	-2066.017	66.129	T-11	75323.769	-1995.586	76.284
T-2	75288.535	-2037.170	68.308	T-12	75330.189	-1995.261	76.321
T-3	75299.973	-2034.734	69.200	T-13	75339.446	-1976.303	74.820
T-4	75303.928	-2026.307	70.916	T-14	75342.617	-1997.681	73.423
T-5	75315.095	-2030.885	70.778	T-15	75336.287	-2013.237	72.460
T-6	75296.134	-2018.372	71.468	T-16	75339.241	-2024.000	73.135

斜面の傾斜変換ライン、遊歩道なども同じくデジタルトレースを行って書き入れた。このようにして作成した測量図が第10図及び第11図である。

(高橋浩二)

4. 調査成果

杉谷1番塚古墳は、呉羽丘陵南西端に発達した杉谷丘陵内の三つの平坦面のうち、南東部平坦面端部の、北東から南西側へ伸びる小さな尾根筋に立地する。富山市教育委員会の図(第5図)では、この尾根筋が後方部北東面の中央へむかって伸びているが、実際には第11図のように後方部の東側隅部近くへ伸びてきている。尾根筋にあたる箇所は、標高73.500～74.750mの等高線にかけて一段高くなっている。前方部の南西側は、標高71.250mの等高線の箇所から69.250mの箇所にかけて急激に低くなっている段差がついている。

古墳はこの間の比較的広い平坦面に、先述のように、尾根筋の高所側に後方部を、低所側に前方部を置いて、側面を崖面のある富山平野側へむけて築かれている。次からは後方部と、くびれ部から前方部とに分けて記述する。

(高橋浩二)

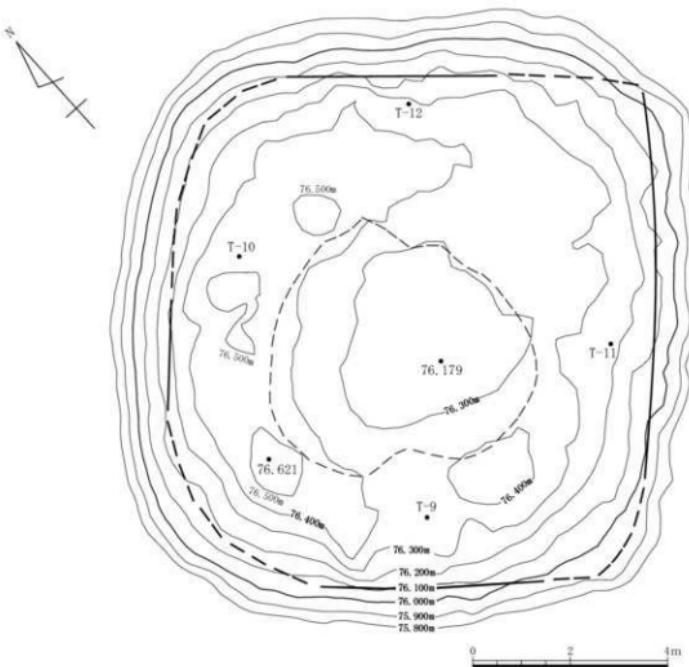
(1) 後方部

後方部の北側、標高73.000～73.750mの等高線の範囲はわずかながら西側へ降るだけであり、広い平坦面となっている。この平坦面の北西側には、遺跡範囲を示す境界フェンスが敷設されているが(東から西側へと続く)、フェンスの手前、標高73.250～73.500mの等高線の箇所には1.0m程の土壘状の高まりが見られる。この土壘状の高まりはさらに南西側へ伸びているが、それが続く範囲は測量していない。なお、土壘状の高まりが見られる範囲は第5図では未測量であり、富山市教育委員会1974の文章にもこれに関する記述は見られない。後方部の北西から西側にかけては、標高72.000～73.000mの等高線の間に、北側隅部から続く平坦面が見られる。平坦面はさらに北西側へ続いているのだが、今回の調査では基準点T-15の範囲までしか測量を行っていない。また、後方部の北東側には、標高73.750～74.500mの等高線の間を西側へと緩やかに降る平坦面が広がる。後方部の東側には、先述のように小さな尾根筋が伸びてきている。標高73.500～74.750mの等高線間隔が狭くなっている箇所が尾根筋の先端にあた

り、ここに12m程の段差がついている。尾根筋の先端と古墳との間は、平坦面の幅が2.5m程と狭くなっている。尾根筋先端につくこの段差の上部は幅4.5～6.0m程の小さな平坦面となっていて、中央に幅1.5m前後のアスファルト敷きの遊歩道が通る。遊歩道の約25～35m南東側からは崖面となっている。

後方部は前方部と比較すると墳丘の遺存状況が良好である。第11図に実線で示したように、西側隅部近くから北西面の中央北側へ約15mといった箇所までは墳裾部が明瞭に残って見られる。ただし、西側隅部では墳裾部の傾斜が緩やかで、くびれ部北西側の平坦面へつながっており、不明瞭である（点線部分）。西側隅部の墳裾は標高72.000の等高線の箇所に位置するものと考えられ、ここから徐々に標高をあげて、北西側では72.250～72.750mの等高線を巡っていく。北側隅部にかけては、第5図の等高線に見られるほどではないが、点線で示したようにやはり墳裾線がやや内側へ入り込んでいく。北側隅部の墳裾の位置はやや不明瞭だが、標高73.250～73.500mの等高線の箇所へ丸みを帯びてつながる。後方部の北東側から東側隅部にかけては、墳丘斜面の中程から墳裾部が外側へ張り出している。北東面中央の墳裾は、北側隅部や東側隅部と比べて、約0.5m強高い位置を巡っている。東側隅部の墳裾は標高73.250mの等高線の箇所までは確認できたが、すぐ東側には墳裾部に接して遊歩道が敷設されている。先述のように第5図において、東側隅部では標高73.250m、南東面中央から南側隅部にかけては標高73.000mの等高線の箇所から墳丘斜面の傾斜がはじまり、この辺りに墳裾を想定しているものと考えたが、現状では緩やかなカーブを描いてつながる遊歩道まで墳丘斜面が伸びており、同じ標高の所に傾斜変換を見い出すことはできなかった。第5図と比較して南東面の墳裾部は全体的に膨らんでおり、富山市教育委員会による調査後にかなり変がすすんだものと判断できる。遊歩道の東側は、崖面との間が約1.0～2.8mの平坦面となっており、この範囲までには墳丘はおさまるものと考えられる。南側隅部の箇所では、やや不明瞭だが、標高72.250mと72.500mの等高線の間に傾斜変換が認められたため、短い実線と点線で墳裾線を示した。

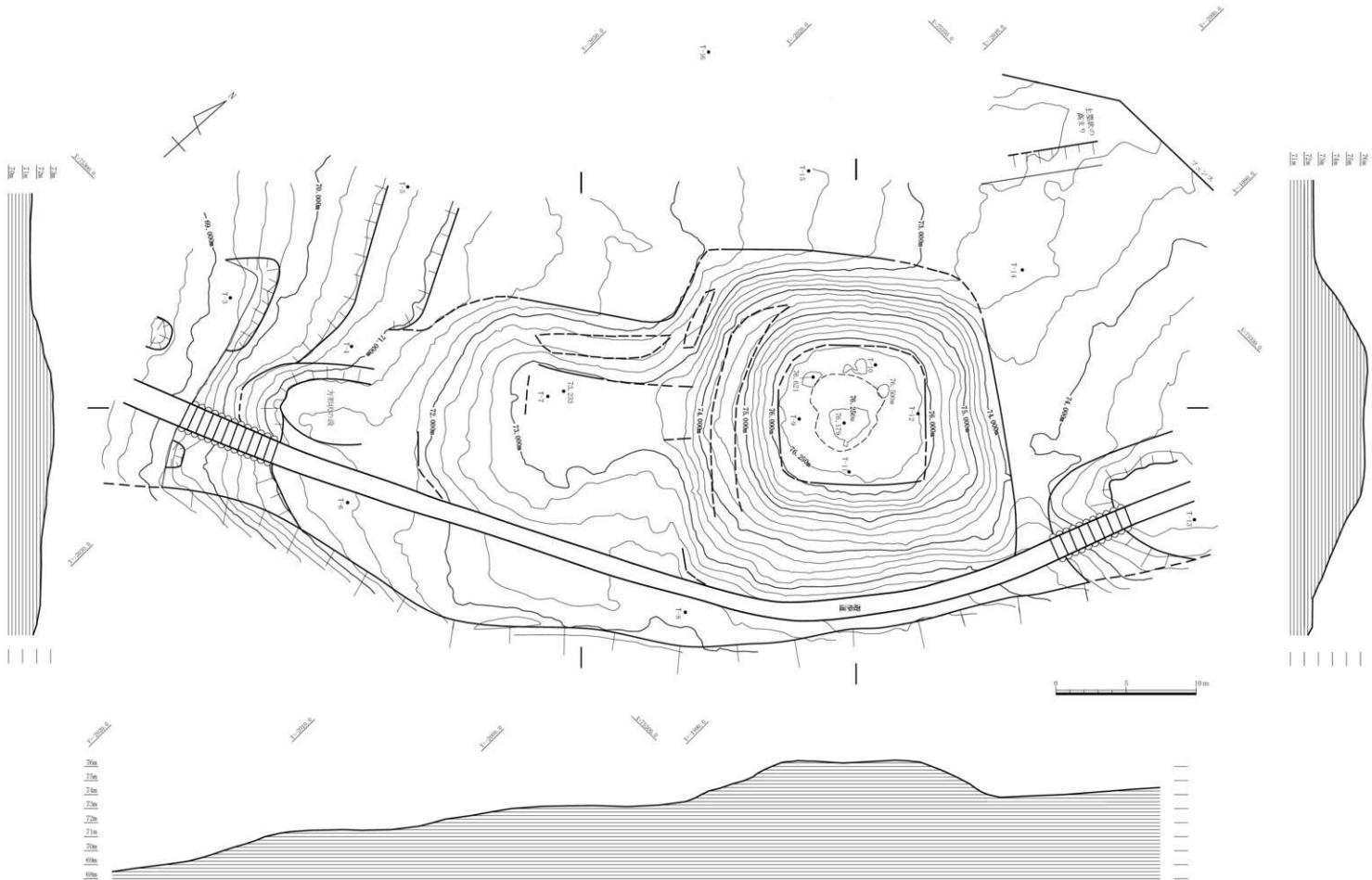
後方部の墳丘斜面は、北西面と北東面、南東面において傾斜が急になる箇所が多く見られる。まず、北西面は墳裾部から標高74.750mまでの等高線の間隔がとりわけ狭く、墳丘斜面の傾斜が急になっている。北東面、とりわけ北側隅部寄りの所も墳裾部から75.000mの等高線辺りまでの傾斜が急になっている。また、北東面の中央は墳丘斜面の中程から墳裾部にかけて等高線がやや内湾して走向しており、斜面の崩落に伴うような様相を見せている。この他にも、樹木の影響で、標高75.250～75.500mの等高線が部分的に膨らむなどの乱れが指摘できる。東側隅部では、標高74.000mの等高線の乱れが目立つ。74.250mの等高線との間がやや広がるのは同じく樹木の影響によるもので、この周辺は斜面の傾斜が緩やかで、小さな平坦面となっている。南東面では、墳丘斜面上半の標高74.750～76.000mの等高線の間の傾斜がやや急である。等高線の走向もやや蛇行が目立つ。また、東側隅部寄りの標高73.250～74.000mの等高線の間の傾斜もやや急である。南側隅部寄りの標高73.000～73.500mの等高線がやや膨らんでいるのも樹木の影響である。前方部に面する西側から南側にかけては、墳丘斜面の中程、標高74.250～74.750mの等高線の間隔が広くなり、ここに帶状に続く平坦面が認められる。この平坦面は西側隅部から北西へ約2.4mといった位置からはじまっている。西側隅部周辺では非常に明瞭であるが、墳丘主軸を越えて南側隅部に近づくにつれ、南東面から続く緩やかな傾斜面と一体になって、



第10図 杉谷1番塚古墳後方部墳頂部平坦面測量図（縮尺1/100）

平坦面は不明瞭になっている。平坦面の幅は1.6～2.1m程である。この平坦面は北西面や南東面にはつながっておらず、段築に伴うものと判断することはできない。また、西側隅部と北西側くびれ部の間、標高72.500～73.000mの等高線の間にも長さ約4.5m、幅0.6～0.9m程の帯状の小さな平坦面が見られるが、第5図には描写されてはいない。

墳頂部は標高76.000mの等高線よりから上が平坦面となっている。墳頂部平坦面の端部ラインは、四辺とも中央では直線的な様相が比較的明瞭に認められるが、四隅の屈曲は不明瞭である。等高線も四隅では曲線を描いて巡っている。墳頂部平坦面の大きさは、主軸方向で約10.5m、その直交方向で約9.9mである。墳頂部平坦面の南西側には根上がりの大きな倒木があり、その影響で等高線の走向も若干乱れている。なお、後方部隅部斜面の等高線は4箇所とも曲線を描いており、墳頂部から墳裾部にかけての稜線は認められない。墳頂部平坦面の中央には、5.3×5.5m程の歪な楕円形の浅い窪みが認められる（第10・11図の細点線部分）。現状での深さは約0.12mである。第4章第1節でもふれたとおり、この窪みを取り囲むように、北東側から西側にかけて0.2m程の高まりが認められる（標高76.400～76.500mの等高線）。第11図では標高76.500mの等高線が3箇所に分かれて見られる範囲がこれにあたる。窪みを掘った際に、かき出された土の堆積ではないかと思われる。墳頂部には石材などの散布は認められなかった。



第11図 杉谷1番塚古墳墳丘測量図（縮尺1/250）

最後に、現状における後方部の墳丘規模等についてまとめる。墳裾部での規模は主軸方向で約24.5mである。南東面における墳裾の位置が不明確だが、仮に遊歩道の位置とすれば、主軸直交方向で約24.7mとなる。高さは北東面の主軸位置で約2.4m、その直交位置にあたる北西面の箇所で約3.5m、南東面も同じく約3.5mである。後方部最高所は墳頂部平坦面の西側で、その標高は76.621mであった。葺石や埴輪などの散布は認められなかった。

(峯村海生・高橋浩二)

(2) くびれ部から前方部

くびれ部及び前方部の北西側には、標高71.250～72.000mの等高線の間に、後方部側から続く平坦面が認められる。平坦面はさらに北西側へ続いているのだが、今回の調査では基準点T-5の範囲までしか測量を行っていない。前方部の南東側にも平坦面が見られる。標高72.250mの等高線が屈曲して南東側へ大きく張り出しているのは、ここに林立する2本の樹木の影響による。遊歩道はこの樹木の西を抜けて、前方部のすぐ南側を通る。遊歩道の約3.0～6.0m南東側からは崖面となっている。

北西側くびれ部付近の墳裾は標高72.000mの等高線に位置に巡っている。ここから前方部にかけては標高71.750mの等高線に沿って巡り、実線で示したように、くびれ部から約10.8m離れた、71.500mの等高線の手前の箇所までは墳裾部が明瞭に残って見られる。北西面の墳裾は図のようにやや外側に開いている。しかし、この箇所から先は明確ではない。前方部の西側において平坦面との間にわずかながら傾斜変換が見られるものの、それは点線で示したように、標高71.250mの等高線に沿って南側へ弧を描いて曲折するものであり、かつ約8.5m先で傾斜面と一体化して完全に不明瞭になってしまう。南東側くびれ部周辺から前方部にかけては、林立する樹木の影響もあって図のように等高線が大きく乱れ、その間隔も広がっている。墳裾部の傾斜は非常に緩やかで、外側の平坦面へつながっており、傾斜変換も認められなかった。そのためこの箇所の墳裾がどの位置を巡っているのかは不明である。遊歩道の西側、標高71.750mと72.000mの等高線の間では、傾斜変換が部分的に明瞭に認められた（実線と点線部分）。この傾斜変換は、位置的に、先述の前方部北西側で認められた点線部分のものと本来つながる可能性も考えられる。ただし、第5図には墳裾部と考えられる傾斜変換線は表現されておらず、また富山市教育委員会による前方部前面の位置の見解とも異なるため、これらの箇所の傾斜変換を墳裾部として確定することはできなかった。

前方部の墳丘斜面は、墳裾部と同じく北西面の遺存状況が良好である。墳丘斜面中腹の標高72.250mと72.500mの等高線の間が若干広がり、ここに帯状に続く平坦面が認められる。この平坦面はくびれ部の位置からはじまり、南東側へ約9.8mのいった辺りで途絶えている。幅は1.5m程度である。この平坦面は他の箇所にはつながっておらず、段築に伴うものと判断することはできない。第5図を見ると、この箇所における等高線は等間隔で巡っており、富山市教育委員会調査後の改変によるものかもしれない。前方部南東面の墳丘高は、北西面と比較して非常に低いものであり、現状では1.0mにも満たない。このような前方部墳丘高の差異は第5図からも確認することができる。

墳頂部平坦面の端部は、北西面では実線で示したように、標高73.000mの等高線に沿って約4.8

mの長さにわたり明瞭に認められる。ここから後方部南西面の標高73.500mの等高線の箇所にかけては、やや不明瞭なため点線で示した。また、前方部の南西側へ降る傾斜面との間にもわずかだが傾斜変換が認められたため、標高73.000mの等高線の北東側に点線で示した。南東側くびれ部周辺では、後方部南西面の標高73.250～73.500mの等高線の箇所に辛うじて認められるものの、その先は墳頂部平坦面が緩やかに傾斜して墳丘斜面へとつながっており、平坦面と墳丘斜面との境界が明確ではない。なお、第5図では墳頂部平坦面を巡る標高73.000mの等高線は南側へ大きく開いていくが、現状の等高線はそこまで張り出してはいない。第4章第1節で述べたように、第5図では墳頂部平坦面の幅が広い印象を受けるが、現状における平坦面の幅は、くびれ部側で3.7m程である。確認できた中で最も平坦面が広いのは南西側の箇所で、南東面の端部を北西面と同じ標高73.000mの等高線辺りに想定するならば、その幅は7.5mを大きく越えない値と推定できるだろう。平坦面の長さは確認できた範囲で約11.8mである。墳頂部平坦面は、くびれ部側の標高が約0.4～0.5m高い。この位置から南西側へ降った後は、平坦面の高さが完全に一定なわけではなく、等高線として表れないが、中央部から南西側の箇所にかけて0.1～0.15m程高まっている。前方部の墳頂部平坦面最高所の標高は73.233mであった。

前方部の西側において、標高71.250mの等高線は、墳裾部外側に広がる平坦面の箇所から屈曲して南側へ続いている。前方部の西側では、この71.250mの等高線の辺りから、緩やかに西側へ降る傾斜面がはじまっている。第5図にはここに点線が入れられているが、位置的にこの傾斜面を表したものと考えられる。南側へむかった標高71.250mの等高線は、再び折れ曲がつて南東側の崖面へとつながっていく。そして、この箇所の南西側には、標高70.250～71.250mの等高線が曲折する箇所に、高さ1.2m程の方形状の段が付く。段の上部には長さ約6.3m、幅約4.7mの平坦面が認められる。第5図では標高71.250mと71.500mの等高線が南西側へ大きく張り出す描写が見られるだけである。また、この段のさらに南西側には、緩やかな傾斜面をはさんで、標高69.250～70.000mの等高線の間に0.7～0.8m程の段差が付いている。これらの段差は、遊歩道の階段部分と高さを揃え、さらに南東側へも続いている。これら方形状の段や、段差が認められた所は、第5図のCトレーナーやDトレーナーの隣接地にあたる。富山市教育委員会の見解では、第5図のCトレーナーやDトレーナーで周溝が確認され、この辺りまで前方部が伸びる可能性が考えられているが、一般的な前方後方墳と比べて前方部が極端に長く、バランスを欠いた形状であることを第4章第1節で述べた。

方形状の段の北東側は、標高71.500mと71.750mの等高線の間が、幅1.3～2.5m程の平坦面となっている。第5図でも、標高71.500mと71.750mの等高線の間がわずかながら広がっている。富山市教育委員会1974の文章では詳しく説明されていないが、前方部の墳頂部平坦面から降る傾斜面はこの位置で途切れ、不明瞭ながらも、この箇所には先述した傾斜変換が認められるとともに、平坦面を伴っている。このように、墳頂部平坦面から降る傾斜面が、方形状の段の所まで続いているようには見えない。現状ではこの傾斜変換の辺りで前方部が途切れているように思われる。

最後に、現状における前方部の墳丘規模等についてまとめる。墳裾部での規模は、上述のように標高71.750mの等高線の箇所に認められる傾斜変換等を参考にするならば、主軸方向で約18.0mである。南東面における墳裾の位置が不明確なため、幅は未詳である。高さは北西側く

びれ部で約1.1m、前方部北西面で約1.2～1.6mである。墳頂部平坦面最高所の標高は73.233mである。後方部と前方部における墳頂部平坦面最高所の比高差は3.388mであった。

この結果、後方部と前方部とを合わせた全長は、約41.5mとなる。ただし、富山市教育委員会の見解のように、周溝が確認されたCトレンチやDトレンチの隣接地にあたる方形状の段や、さらに南西側の段差の辺りまで前方部が伸びていたとすれば、前方部の長さは約32m、またはその規模を越えるものと考えられる。この場合、古墳の全長は約55.5m、あるいはこの値を越える規模となる。前方部においても葺石や埴輪などの散布は認められなかった。（高橋浩二）

注

(1) 富山市教育委員会 1974 参照。

文献

富山市教育委員会 1974 『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』



第12図 測量調査作業風景

(①:清掃、②:トータルステーション測点、③:後方部斜面測点、④:前方部墳頂部平坦面測点)

第5章 表採遺物

今回の調査中、墳丘やその周辺において土師器や陶磁器片など20点の遺物を表採した。このうち、図化することができた8点を取り上げて説明する。

1は、弥生土器または土師器の高杯あるいは器台の口縁部と考えられるものである。後方部頂部平坦面の北西側端部付近、標高76.138mの箇所で表採した。口縁部復元径14.0cmを測る。口縁部はわずかに外反して聞く。口縁端部は丸くおさめられている。内外面ともに調整は不明だが、表面は平滑である。色調は外面が明赤褐色、内面が明褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

2は、弥生土器または土師器の高杯杯部と考えられるものである。後方部北西斜面の標高73.297mの箇所で表採した。風化してやや不明瞭だが、口縁端部が遺存していると考えられる。外面は平滑であり、ミガキ調整が施されていると考えられる。色調は外面が明褐色、内面が明赤褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

3は、弥生土器または土師器の脚裾部で、土器片3点が接合したものである。後方部北西斜面の標高75.931mの箇所で表採した。底部復元径は8.0cmを測る。裾端部は丸くおさめられている。内外面ともに調整は不明だが、表面は平滑である。色調は外面が明褐色、内面が明赤褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

4は、弥生土器または土師器の装飾器台の器受部と考えられるものである。後方部東側隅部近くの遊歩道東側、標高72.883mの箇所で表採した。器受部外面には3ないし4条分の擬凹線文が認められる。器受部の外面と、器台部へつながる部分には赤彩が認められる。調整は不明である。色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

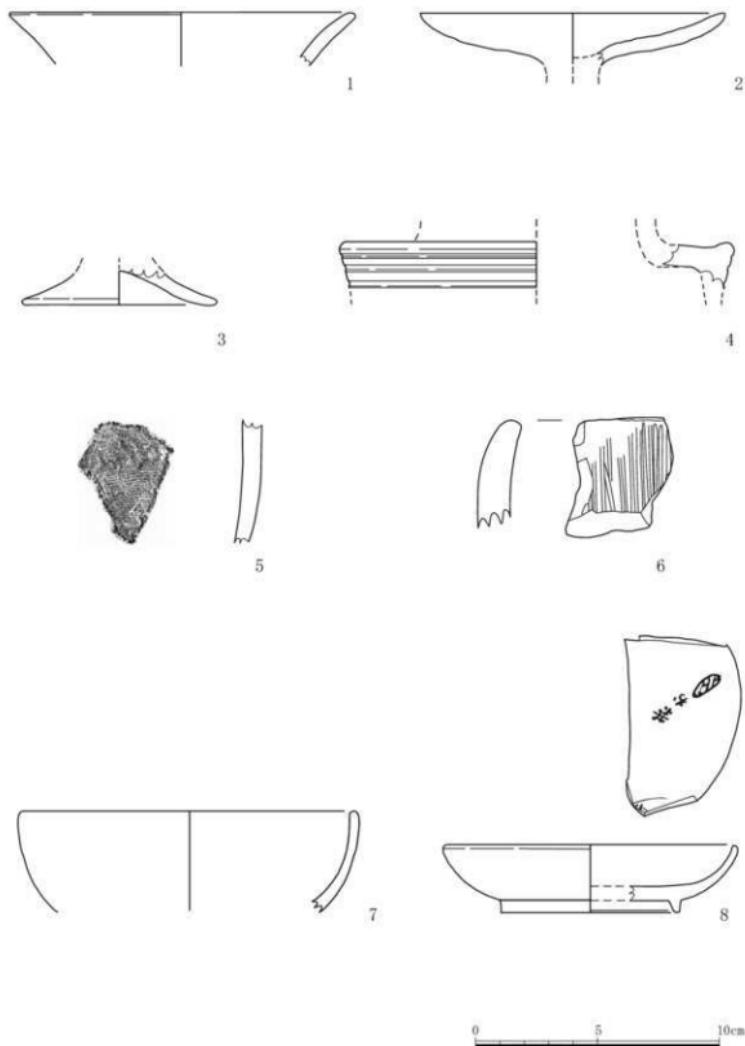
5は、弥生土器または土師器の胴部破片である。器種は不明である。内面には細かなハケメ調整が施されている。色調は内外面ともに明褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

6は、土師器と考えられる口縁部破片である。器種は不明である。前方部西側の緩傾斜面において標高70.885mの箇所で表採した。外面には縦方向のミガキ調整が施されている。色調は内外面ともに明赤褐色を呈する。胎土には1~2mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。

7は、陶器碗の口縁部である。後方部南側隅部周辺の標高72.573mの箇所で表採した。口縁部復元径14.0cmを測る。口縁部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめられている。内外面ともに黄緑灰色の釉が施されている。断面の色調は灰白色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

8は、磁器の皿である。後方部西側隅部から北側へ約4.0mいった墳丘斜面、標高72.544mの箇所で表採した。口縁部復元径12.0cm、器高2.8cmを測る。見込み部から胴部内面にかけて「紫わ」の字と、片側が尖り気味の楕円形の中に斜線が入った紋様が青藍色で描かれている。また、別の箇所にも青藍色と茶色の線の描写が見られる。胴部と高台部との境には、内外面に青藍色の輪線を1条巡らす。内外面ともに透明の釉が施されている。断面の色調は白色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

(峯村海生・高橋浩二)



第13図 表採遺物（縮尺1/2）

第6章 まとめ

今回の調査は、計画にしたがって杉谷1番塚古墳に対象を移し、第1次調査として墳丘及び周辺地形の測量調査を実施した。

杉谷1番塚古墳は、吳羽丘陵南西端に発達した杉谷丘陵内の三つの平坦面のうち、南東部平坦面端部の、北東から南西側へ伸びる小さな尾根筋に立地する前方後方墳である。比較的広い平坦面に、尾根筋の高所側に後方部を置き、側面を崖面側の富山平野へむけて築かれている。

後方部の墳裾は、第11図に実線で示したように、西側隅部近くから北西面中央北側にかけてと北東面において比較的良好な遺存状況が確認できた。一方、西側隅部や北側隅部周辺、南側隅部ではやや不明瞭である。また、南東面の墳裾部は富山市調査後にかなり改変がすんだものと考えられるため、仮に遊歩道の位置とした。前方部に面する南西面には、墳丘斜面の中程に幅1.6～2.1m程の帯状の平坦面が見られるが、他の箇所にはつながっておらず、段築とは認められない。墳頂部には広い平坦面が認められる。平坦面の中央には 5.3×5.5 m程の歪な楕円形で、深さ約0.12mの浅い窪みが見られ、土がかき出された跡と考えられる。

くびれ部から前方部の墳裾は、北西面の遺存状況が比較的よく、前方部先端へむけて外側へやや開いていく状況が認められた。一方、南東面は等高線が大きく乱れ、墳裾の位置が不明確なため、くびれ部及び前方部の幅は不明である。前方部北西斜面の中程にも幅1.5m程の帯状の平坦面が見られるが、同じく段築とは認められない。前方部の墳頂部にも広い平坦面が見られ、北西側の平坦面端部が墳裾と並行して外側へ開く状況が認められた。

前方部前面の位置について、富山市教育委員会の見解では、第5図のC及びDトレーナーで周溝が確認され、この辺りまで前方部が続く可能性が考えられている。第11図で言えば、この箇所は前方部南西側の方形状の段や、さらに南西の段差にあたり、ここまで墳丘が伸びるとすれば、前方部の長さは約32m、またはその規模を越えると考えられる。この場合、古墳の全長は約55.5m、またはこの値を越える規模となる。今回の調査では、前方部の墳頂部平坦面から降る傾斜面が標高71.750mの等高線で途切れ、方形状の段の所まで続くようには見えないことや、この等高線の位置には不明瞭ながら傾斜変換が認められ、それとともに平坦面を伴うことなどから、この箇所を前方部前端の候補と考えた。後方部との規模のバランスからみても、大きな違和感はないであろう。この場合、方形状の段は別の墳丘、あるいは自然地形と考えられる。ただし、富山市調査後の改変の可能性も否めないため、さらなる調査が必要である。なお、葺石や埴輪などの散布は認められなかった。以下に今回の調査で判明した墳丘の推定値を示す。

墳形；前方後方墳

後方部高：約2.4m（北東側）、約3.5m（北西側）

全長：約41.5m

くびれ部高さ約1.1m(北西側)

後方部長：約 23.5m

前方部長：約 18.0m

後方部幅：約 24.5m

前方部高：約 1.2 ~ 1.6m (北西側)

後方部墳頂部平坦面；長約 10.5m，幅 9.9m

壇頂部平坦而最高所標高；76.621m（後方部）、73.233m（前方部）

後方部と前方部墳頂部平坦面最高所の比高差：3.388m

(高橋浩二)

図 版



1 井田川堤防から杉谷丘陵を見る（矢印が杉谷 1 番塚古墳の位置、南東から）



2 後方部北東面（東から）



3 後方部北側隅部から北東面を見る（北西から）



4 後方部東側隅部から北東面を見る（東から）



5 後方部東側から南東面を見る（北東から）



6 後方部南東面（南から）



7 後方部北側隅部から北西面を見る（北東から）



8 後方部西側隅部から北西面を見る（南西から）



9 後方部南側隅部周辺（南から）



10 後方部填頂部平坦面（南から）



11 北西側くびれ部周辺（北西から）



12 北西側くびれ部（北西から）



13 南東側くびれ部（南東から）



14 前方部北西面（奥は後方部、西から）



15 前方部墳頂から後方部を見る（南西から）



16 方形状の段から前方部を見る（最奥に見える高まりは後方部、南西から）



17 方形状の段から前方部を見る（南西から）



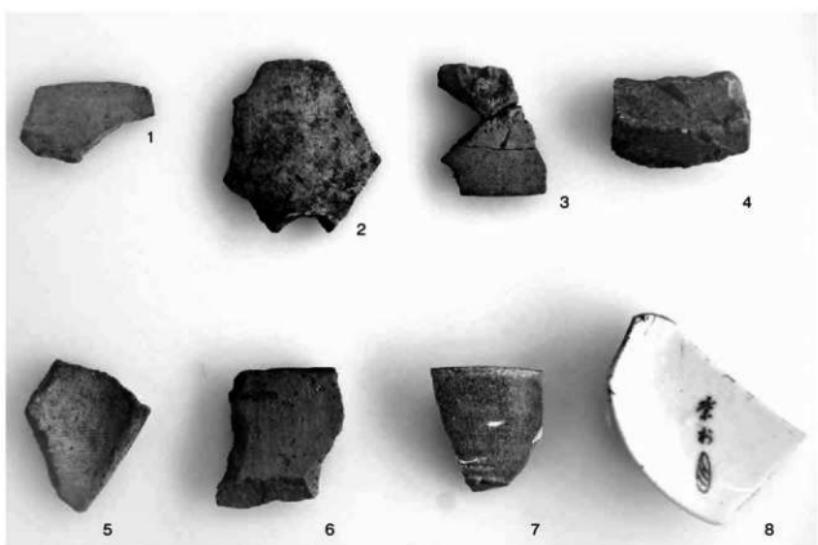
18 前方部（左側）から方形状の段にかけて（北西から）



19 後方部北側の土壠状の高まり（南から）



20 土器出土状況（第13図1のもの）



21 表採遺物

ふりがな	すがたにほんづかこふん-だいじじょうさはうくしょ-					
書名	杉谷1番塚古墳－第1次調査報告書－					
副書名						
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	高橋浩二（編）、峯村海生、村口友美、大上立朗					
編集機関	富山大学人文学部考古学研究室					
所在地	〒930-8555 富山県富山市五福3190 TEL 076 (445) 6195					
発行年月日	2020年3月27日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
杉谷1番塚古墳	とやかけんとうやまし 富山県富山市 杉谷2630	36度 40分 44秒	137度 8分 37秒	20180731 ～20180920		学術調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
杉谷1番塚古墳	墳墓・古墳	弥生～古墳	前方後方墳	弥生土器・ 土師器、陶器、 磁器	<p>富山市教育委員会が1974年に測量及び発掘調査した古墳について、さらに詳細な墳丘図の作成を主な目的に、あらためて測量調査を実施した。</p> <p>その結果、前方後方墳であることを再確認した。また、後方部の北西面及び北東面の墳裾部や、くびれ部から前方部の北西面における墳裾部、そして墳頂部平坦面が比較的良好に遺存することを確認した。前方部前面の位置が不明確なため問題を残すが、今回の調査では古墳の全長が約41.5mになるものと推定した。墳丘や周辺から数点の土器を表探した。</p>	

2020年3月27日印刷
2020年3月27日発行

杉谷1番塚古墳 －第1次調査報告書－

編集・発行 富山大学人文学部考古学研究室
〒930-8555 富山県富山市五福3190
TEL 076-445-6195

印 刷 株式会社チューエツ

